――特集・変成する言葉――古代文学の書物・身体・知――夏期セミナー

枕詞の変成

大浦誠士

一、はじめに

「枕詞」という語は上代の文献には見られない。それが見られるようになるのは中世の頃からと言われている。[1]とするなら、万葉集の時代には枕詞という概念はなかったことになる。しかしそうでありながら、今日枕詞と呼ばれている現象が、万葉歌に普遍的に存在し、万葉歌の表現を特徴付けていることもまた確かである。考えれば考えるほど解らない不可解性を抱えながら、不思議な力を持つ枕詞。本稿は、そのような枕詞の力を探るとともに、多様に見える万葉集の枕詞のあり方を、今回のセミナーのテーマである「変成」[2]という概念を導入することにより考えてゆく試みである。なお、今回のセミナー報告は、前稿「枕詞の古代性をどう見るか」[3]を展開させる形で行ったため、前稿と重複する箇所があることを申し添えておく。

二、枕詞の力

西郷信綱「枕詞の詩学」[4]は、枕詞について考えるに際しては、それが口誦の歌の所産であるという前提を据える必要があることを説く。そして西郷論は、突き詰めれば語義もかかり方も不明なままに強い喚起力をもってある語を引き出す枕詞のあり方を、「詩学」として追究してみることの重要性を提起する。また、品田悦一「枕詞　世界の謎を体感する」[5]も、「実質的な意味」はない代わりに「ある種の力」が備わっている枕詞の不思議な性質に言及し、その力の源を、「人間が体内から発する声」に求めている。品田論は、必ずしも文字以前に限定することなく、記載の歌をも視野に入れて、枕詞が肉声によって発せられた時に持つ力を論じているものと見え、西郷氏の所論との間にはやや相異が見られるものの、音声として発せられる枕詞の力を指摘する点では共通している。鹿持雅澄『枕詞解』（『古義』）の、

言霊のあやしく妙なることわりは、おくかしられず、そこひはかりがたき中にも、此枕詞といふものは、たとふべきすぢなく、いふべき物もなく、あやしく貴きもの、限になむありける。

という枕詞観は、枕詞を極端に神秘化したものと受け取られることが多いが、「言霊」の力への言及として見ると、右の西郷・品田両氏の論に述べられるような枕詞の不思議な力を、どこか

で感じ取っている発言と見ることもできるであろう。

枕詞というものが、個々の意味とは別次元で何らかの力を持っていたことは、次のような例を見ることによっても知られる。

出雲国風土記・意宇郡に見られる所謂国引き神話においては、八束水臣津野命が次々と「国の余り」を見いだしてはそれを引く詞章が繰り返されるのであるが、その繰り返しの核心部分――国引きを行う部分――に至ると、枕詞ないし枕詞的な表現[6]が頻出する傾向が見られる。

…童女の胸鋤取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の網うち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに、国来々々と引き来縫へる国は、…

ほぼ一句ごとに枕詞が置かれることにより、五七のリズムが形成されていることも大きく関わるのであろうが、叙述の高揚と枕詞の多用には、何らかの関連があるようである。

右の国引きの詞章などは、口誦における叙述の高揚との関わりが想定されるものであるが、同様の現象は、記載の歌においても確認することができる。たとえば柿本人麻呂「泣血哀慟歌」において、妻の死を使者の言葉によって知る場面では、

…沖つ藻の　靡きし妹は　黄葉の　過ぎて去にきと　玉梓の　使の言へば　梓弓　音に聞きて　言はむすべ　為むすべ知らに…（②二〇七）

と、一句ごとに枕詞が用いられる。仮に右の叙述から枕詞を抜き去ると、

…靡きし妹は　過ぎて去にきと　使の言へば　音に聞きて

…

という非常にわかりやすい整然とした――しかし決して歌とは呼べない――内容となる。それをあたかもうちくらますかのように枕詞が一句ごとに挿入されるのである。個々の枕詞の持つ表現性に着目するなら、「沖つ藻の」「黄葉の」「玉梓の」といった枕詞が、藻のしなやかな靡き、散りゆく黄葉などの像（イメージ）をその都度ふくらませつつ叙述が進行して行くのだと、一応の説明はなしうるだろうが、さきの国引きの詞章をも参看するとき、そもそも枕詞が多用されることの意味を問うてみることが必要だろう。そしてそれは、右の場面が妻の死の知らせを受けるという「泣血哀慟歌」第一長歌の最初の高潮部であることと関係するのであろう。

以下、枕詞がどのように不可解性を抱え込みつつ、それがどのようにして力を持つのかを考えてゆきたい。

三、枕詞の変成1――文字と語形――

前掲西郷論文は枕詞が語義やかかり方不明なままに強い喚起力を持つことを指摘するが、その不明性・不可解性は、語形のレベルにまで及んでいるものと見なければならない。

多田一臣「『八雲立つ』歌謡を考える」[7]は、地名イヅモに冠される二つの枕詞ヤクモタツ・ヤツメサスについて考察し、それが伝承との結びつきを断たれ、固定化した枕詞として音声による継受をもっぱらとするようになった段階においては、ヤクモタツ・ヤツメサスいずれともつかぬ表現であったものが、文

字の介在によってイヅモが「出雲」「出藻」という理解を固定させるに伴って、「八雲立つ」「八つ芽さす」という枕詞が成立した、という道筋を提起している。先述のように枕詞が口誦に由来する表現であったとするなら、現在我々が目にしている枕詞までの間には、必ず音声の文字化の問題が横たわっているはずであり、多田氏の言うような文字の介在による枕詞の固定化の問題は当然考えてみる必要があるものと思われる。

人麻呂歌集所出のいわゆる略体歌の中に、「母」にかかる枕詞を「足常」と記した例があることについては前稿でも触れた。

足常　母が養ふ蚕の繭隠り隠れる妹を見むよしもがも　（⑪二四九五）

諸注釈の扱いは、「足常」をタラチネノと訓むものと、タラツネノと訓んでタラチネノの音転として処理するものとに分かれている。しかし、現在の訓読法においては、「足常」をタラチネノと訓むことは難しく、また初期万葉にタラチ（ツ）ネノという枕詞が見られず、右の「足常」が「母」にかかる枕詞の初出例であることを考え合わせると、タラツネノをタラチネノの音転として処理してしまうことも躊躇われる。[8] 人麻呂歌集歌には、非略体の歌に、

垂乳根之　母が手放れかくばかり術なきことはいまだせなくに（⑪二三六八）

と、明らかにタラチネノを表記した例も見られ、前掲多田氏の論を援用して捉えると、タラツネノあるいはタラチネノのいずれともつかぬ――いずれにも固定化しうる――語であったものが、文字によって掬い取られる際に、「足常（タラツネノ）」「垂乳根之（タラチネノ）」の両様に固定化されたと捉えることができるのである。

そのような観点で上代文献の歌を見るとき、次のような紀歌謡の枕詞の例が注目される。

いすのかみ（伊須能箇瀰）　布留を過ぎて…（紀94）

武烈紀に載る影姫の歌であるが、「須」という表記から見て、イスノカミという形であることは明かである。万葉集には、「布留」にかかる「石上」の例が十一例見られるほか、[9]

石上　降るとも雨につつまめや妹に逢はむと言ひてしものを（④六六四）

と「降る」にかかる枕詞となっている例も見られるが、いずれも「石上」と表記されており、イソノカミと訓まれているのが正しいものと思われる。

また継体紀の歌謡には、

…つぬさはふ（都奴娑播符）　磐余の池の…（紀97）

と、磐余にかかる枕詞がツヌサハフの形で記されているのを見る。また仁徳紀歌謡にも、

つぬさはふ（菟怒瑳破赴）　磐之媛が…（紀56）

という形が見られるが、「怒」字は紀歌謡において、

…さ寝床も　與はぬ（怒）かもよ…（紀4）

…戦へば　我はや飢ぬ（怒）…（紀12）

のようにヌの表記に当てられる一方、

千葉の　葛野（伽豆怒）を見れば…（紀34）

いざ吾君　野（怒）に蒜摘みに　蒜摘みに　我が行く道に…（紀35）

と「野」にあたる語の表記にも用いられており、ツヌサハフ・ツノサハフいずれの可能性も残す。[10] ただ、前者が「ず」「ぬ」という二種の助動詞の表記であり、後者がいずれも「野」という名詞の表記であることを考えると、後者は「野」の意でヌが用いられている可能性も否定できず、紀56もツヌサハフの例である可能性の方が高いと判断できよう。一方万葉集では、五例見られるツノサハフはいずれも「角障経」と表記され、[11] 万葉集ではツノサハフの形で捉えられていることは確かであろう。

このような例を見ると、枕詞の語形の異なりを、音転として軽微に見ることはできない。口誦の歌世界において、ある幅を持って揺れながら存在していた枕詞が、文字によって掬い取られる際に起きている現象として捉えてみることが必要だろう。文字との接触による語形レベルでの枕詞の変成である。

四、枕詞の変成2――語義の再解釈――

枕詞の文字による変成に関して注目されるのは、澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麿の独創性」[12] が指摘する現象である。たとえばアサシモノ・ツマゴモルについて、

阿佐志毛能――みけのさを橋　（景行紀）

朝霜之――消なば消言ふに　（巻二、一九九）　人麻呂

朝霜――消なば消ぬべく　（巻十一、二四八五）　人麻呂集

逗摩御慕屢――を佐保を過ぎ　（武烈紀）

嬬隠有――屋上の山　（巻二、一三五）　人麻呂

妻隠――矢野の神山　（巻十、二一七八）　人麻呂集

のような用例を参照しつつ、記・紀においては難解であったものが、人麻呂において極めてわかりやすいものに変容していることが指摘される。紀歌謡においては、アサシモノ・ツマゴモルがどのように「みけのさを橋」「を佐保」にかかっているのかが不明であり、それゆえにアサシモノ・ツマゴモルの語義そのものも不明であるのに対して、人麻呂関係の用例では、訓字による表記によって、「朝に降りる霜」、「妻が隠る」という語義が明確に示され、それぞれ「消」「屋（ヤ）」にかかるというかかり方が非常に明確に読み取れるというわけである。前項で見たのは、文字の介在によって語形が二様に固定化された例であったが、これらの例は、枕詞が訓字で表記されることを契機として、枕詞の語義やかかり方の再解釈が行われている例と言うことができる。

万葉集で最も多く用いられるアシヒキノについても、見逃してしまいそうだが重要な変化がすでに指摘されている。

阿志比紀能――山田を作り　（允恭記）

阿資臂紀能――山田を作り　（允恭紀）

足日木乃――山のしづくに　（巻二、一〇七）　大津皇子

足曳之――山かも高き　（巻十、二三一三）　人麻呂集

足引――山道も知らず　（巻十、二三一五）　人麻呂集

記・紀のアシヒキノにおいては乙類のキが用いられるのに対して、万葉集では甲類・乙類両様のキが見られることの指摘であるが、これも澤瀉論が示す甲類・乙類それぞれのアシヒキノの表記を見ると、元来は乙類のキであり、乙類のキでは意味が不明であるアシヒキノが、人麻呂を境として訓字で記されること

によって甲類のキに変容する――これも枕詞の語形そのものが文字によって変容を受けている例と言えよう――とともに、そこに語義が見いだされている[13]ことが見て取れるのである。

また、記・紀や初期万葉ではウチ（内）にかかるのを基本とするタマキハルが、やはり人麻呂を境にイノチ（命）にかかる枕詞へと変容する[14]ことを指摘する箇所では、

「うち」とつゞくのは所謂記紀時代の枕であり、「いのち」とつゞくのは萬葉時代の枕である。それを一つにして解釋しようとすればこそむつかしい事になるのであるが、別々に見てよいのではなからうか。

と言う。これまで枕詞の総体を包括的に捉えようとしてきたがために、見逃してきたものがあるのではないかということである。今年のセミナーのテーマである「変成」に絡めて言うなら、右に見たような枕詞に関する現象は、枕詞が文字と接することによって語義レベルにおいて変成を受けていることを示しており、澤瀉氏の指摘に従うと、それは語義・かかり方ともに、意味が明確になるという方向性での変成であろうと考えられる。

そのような観点を導入してみるとき、廣岡義隆『上代言語動態論』[15]に掲載されている多寡順配列の枕詞用例数は非常に興味深い一覧である。一覧によれば、「あしひきの　一〇八」「ぬばたまの　八〇」のような用例数の多い枕詞から、次第に用例数が減ってゆき、万葉集中に二例のみのもの六五種類、孤例のもの一九六種類まで、断層なく並んでいる。廣岡論は言語遊戯的な様相を見せる稀少例の枕詞の種類が多いことから、枕詞の本質を言語遊戯と捉えるのであるが、むしろ「あしひきの」「ぬばたまの」のような語義不明のまま繰り返される定型的枕詞から、一回的、言語遊戯的な枕詞までが、断層なく連続的に存在しているという事実こそが重要なのではなかろうか。一回的と見える枕詞には、「葦鶴の哭のみし泣かゆ」（③四五六）「妹らがり今木」（⑨一七九五）のように語義・かかり方ともに明確なものが大多数を占めており、口誦由来の枕詞が文字による変成を受けた先に生じてくるものと見なし得るのである。そしてそれらの二様の枕詞が連続性を持って存在していることは、一回的な枕詞群も、定型的な枕詞群の持つ本質を内在させているものとして捉えるべきことを示唆しているように思える。

たとえば人麻呂作品の枕詞については、しばしば文字による枕詞の再解釈[16]が指摘され、また新たな枕詞の創造についても論じられているが、そのような新たな枕詞や枕詞解釈がなぜ力を持ち得るのかについての考察が必要なのではないか、ということである。

五、「さだまりてつゞけてよむこと」

吉本隆明『初期歌謡論』[17]の「枕詞論」は、枕詞の考究にあたって、藤原清輔『和歌初学抄』の言説を徹底的に参観している。折口信夫の論を援用しつつ枕詞と被枕を同一語の繰り返しとする吉本論の結論には賛同しかねるものの、枕詞を和歌における定型的・類型的な言い回し全体の中で把握しようとする『初学抄』の言説に着目するところには、実作者でもある吉本の眼力の鋭さを感じる。

『初学抄』は「次詞」という標目のもとに、「又さだまりてつゞ

けてよむことあり」として、「あかねさすひ」「あまざかるひな」「いその神ふる」「神かぜのいせ」など、現在の我々が枕詞と呼んでいる表現を列挙している。さらに「喩来物」においては、「又むかしよりいひならはしたることあり」として、序詞表現や比喩的な表現も交えながら、

ひさしき事には　ミヅガキ　松ノハ　ツルノケゴロモ
イハホ　カメ　タケ　スミヨシ

なに事かおはしますらむみづがきのひさしくなりぬみたてまつらで

ながき事には　スガノネ　山ドリノヲ　タマカヅラ　アキノヨ
春ノヒ　タクナハ　クロカミ

ちりぬべきはなみるときはすがのねのながき春日もみじかかりけり

みじかき事には　タマノヲ　夏ノヨ　春ノヨ

たまのをのたえてみじかき夏夜のよはになるまでまつ人のこぬ

のように、枕詞の例を多く掲げている。歌における定型的常套表現全体の中で、おそらくその最も凝縮された表現として枕詞を捉えるのであるが、「さだまりてつゞけてよむこと」とはつまり、共同性を凝縮的に内在させた言葉と言い換えることができる。折口信夫[18]はその共同性を神にまつわる伝承や詞章の圧搾として捉えるのだが、いかなるものを背負っているのか、或いはいないのかは、突き詰めれば不明と言う他ない。歌世界の継続とその中での蓄積が形成する共同性を捉えておくことこそが重要なのであろう。

そして『初学抄』が枕詞を「むかしよりいひならはしたること」として捉えようとする点は、『歌経標式』が枕詞を「古事」と呼ぶことにも通じている。前稿にも触れたところだが、『歌式』「雅体」中の「頭古腰新」「頭新要古」「頭古要古」等においては、序詞的な表現や類型的な表現にまじって、「あづさゆみひきつ」「あをによし　なら」という、いわゆる枕詞が「古事」と称されている。

梓弓は是れ古事の喩にして、引津は喩の名なり。

以て引きの喩を陳べまく欲りするが故に、梓弓を発句に陳べて古事とし、弓を以て引きの名を顕す。

という記述を見ると、発句に「梓弓」という「古事」を置くことによって、「弓→引き→引津」という「喩」が生じ、その「喩」の力によって「引津」という「喩の名」が引き出されるという構造が考えられているようである。ただしここに言う「古」とは、私たちが言う所の「古さ」とは異なるものと見なければならない。歌の歴史を俯瞰的に――限られた資料の中でではあるが――見ることのできる私たちとは異なり、作歌の現場では「古」というものがどのように意識されていたのだろうか。おそらくそれは、昔から用いられている、決まってそのように詠むという型に支えられた幻想であっただろう。いわば様式性の中で今、ここに幻想される「古」[19]である。

前稿では、主想の文脈とは異次元の文脈とする井手至論[20]と、枕詞の特質に社会性を指摘する土橋寛論[21]を参照しながら、枕詞の置かれている文脈を「社会的古文脈」と呼んだ。個の表現に閉じることなく、共同性・社会性に向かって開かれ、そこに繋

がって行こうとする様式的力が枕詞なのではなかろうか。主文脈とは異なる「社会的古文脈」に置かれる五音句という様式の持つ力によって、詠作された歌は歌世界の「網の目」[22]に繋ぎ止められるのである。さらに一回的に見える枕詞においても、主文脈とは異なる文脈に置かれた五音句がある語を不思議な力――『歌式』はそれを「喩」と呼ぶ――で呼び起こしてくるという型自体は共通して存在するのであり、その型によってこそ、一回的な枕詞も力を持ちうるのである。

六、おわりに

下河辺長流の『枕詞燭明抄』は、歌に枕詞が用いられることを、人に氏姓があることに準えて次のように言う。

歌に枕詞あるは人に氏姓あるに同じ。氏を置きて呼ぶ名の長きが如く、古き歌のたけ高く聞ゆるは枕詞を置き、多くは序より続けたるが故なり。

この『燭明抄』の枕詞観を逆から読むと、「枕詞を置くことによって歌は古き丈高き歌に聞こえる」ということになる。今回の考察は、そのことを求めて試行錯誤を重ねたものであったのかも知れない。

注(1) 近藤信義『枕詞論―古層と伝承―』(桜楓社、一九九〇)によれば、「枕詞」という用語は北畠親房『古今集序註』あたりに想定できるという。

(2) 本稿では、あるものが何かとの接触を契機として、もとの特質を残存させつつ変化を被るという意味で「変成」という語を用いる。

(3) 拙論「枕詞の古代性をどう見るか」(『国文学　解釈と鑑賞』ぎょうせい、二〇一一・五)。

(4) 西郷信綱「枕詞の詩学」(『古代の声』朝日新聞社、一九八五)。

(5) 品田悦一「枕詞　世界の謎を体感する」(『【うた】をよむ――三十一字の詩学』(三省堂、一九九七)。

(6) 「童女の胸鋤取らして」「大魚のきだ衝き別けて」の箇所は、語法的な説明としては「童女の胸」「大魚のきだ」が「鋤」「衝き別け」を導く序詞ということになるだろうが、きわめて枕詞に近似する用法と言えよう。

(7) 多田一臣「『八雲立つ』歌謡を考える」(『万葉歌の表現』明治書院、一九九一)。

(8) 人麻呂歌集歌の時代的位置付けについては、稲岡耕二『萬葉表記論』(塙書房、一九七六)による。人麻呂歌集の略体・非略体表記の文学史的意義については、木簡等の歌の表記との関わりで、現在議論がなされている状況にあるが、人麻呂歌集歌の時代的位置付けについては、稲岡論に従うべきものと考える。

(9) 小地名「布留」に大地名「石上」を冠したものとも見られるが、九例ともに同じ形をとっており、その類型性・固定性から見て枕詞と呼んでも差し支えないものと考える。

(10) いわゆる日本書紀のα群・β群による異なりがないかとも考えて見たが、明確な異なりがあるようには見えない。

(11) 「石見」にかかるもの一例(石見相聞歌)、「磐余」にかかるもの四例。文字による解釈については、井手至「ツノサハフ・シナテル・シナタツ――枕詞の解釈をめぐって

――」（『萬葉』三九号）によって「草の芽をさえぎる岩」の意とする注釈書（『釈注』など）と、「人の近づき難いごつごつとした岩場」とする注釈書（『全解』）とが見られる。

(12) 澤瀉久孝「枕詞を通して見たる人麿の独創性」（『萬葉の作品と時代』岩波書店、一九四一）。

(13) 「足引」「足曳」系統の表記が多い中で、「足疾」「足病」といった表記も見られ、山が裾野を長く引く、足を引きずりながら山を行く等々、多様な再解釈がなされているようである。

(14) 山上憶良の歌にのみ「たまきはる　内の限りは」（⑤八九七）の例があり、澤瀉氏は「古語を弄ぶ事を好んだ憶良によつてたま〳〵一度模倣的に用ゐられた」と言う。

(15) 廣岡義隆『上代言語動態論』（塙書房、二〇〇五）。

(16) たとえば「吉野讃歌」の二つの長歌冒頭では、ヤスミシシという枕詞が「八隅知之」「安見知之」と二様に書き分けられ、それぞれの長歌に歌われる内容に即して、文字によってそれぞれ意味が付与されている。

(17) 吉本隆明『初期歌謡論』（河出書房新社、一九七七）。

(18) 折口信夫「文学様式の発生」「律文学の根柢」（『折口信夫全集』第七巻）など。

(19) 拙論「万葉歌における〈模倣〉」（『古代文学』五一号、二〇一二・三）。

(20) 井手至「枕詞と序詞」（『遊文録　萬葉篇二』和泉書院、二〇〇九）。

(21) 土橋寛『古代歌謡論』（三一書房、一九六〇）。

(22) 前掲注（19）拙論。